

平城宮跡・藤原宮跡の整備

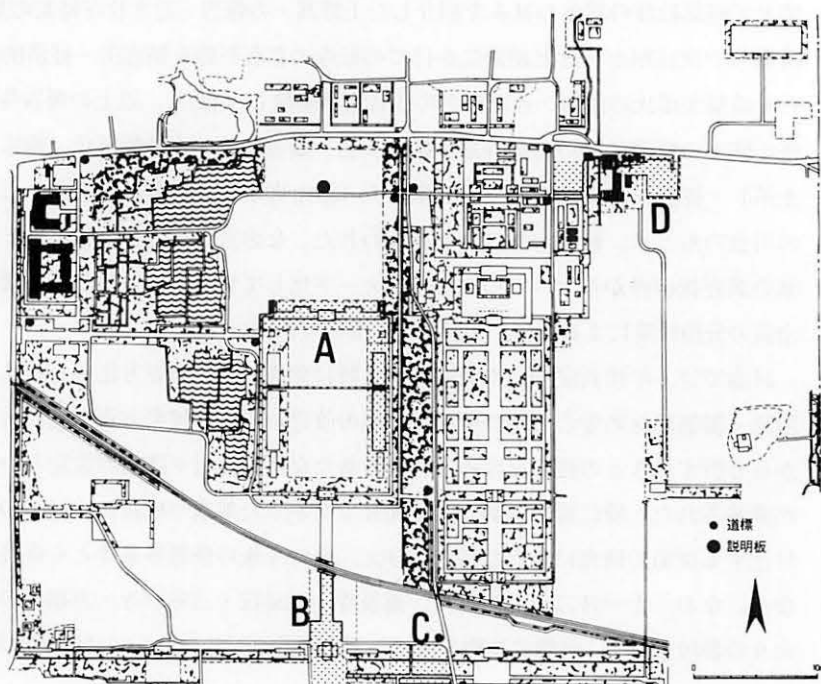
庶務部・平城宮跡発掘調査部，飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1. 平城宮跡の整備

1987年度に実施した平城宮跡の整備は，第一次朝堂院地区整備，朱雀門跡周辺地区整備，二条大路整備，覆屋周辺整備，平城宮説明板及び道標の設置などを行った。

第一次朝堂院地区整備 昨年度決定した暫定整備計画に基づき，奈良時代に2時期ある遺構変遷を，表示手法を変え整備することとした。第Ⅰ期（奈良時代前半）のものとして，大極殿院南回廊（幅11.256m），南門（28.33m×17.12m），東・西楼基壇（27.63m×12.68m）をいずれも平均高さ20cmの盛土の上張芝をし復原表示した。南回廊の東西両端部からそれぞれ北へは，後述の第Ⅱ期築地と重複するが，回廊幅の方が広いことから築地下段に第Ⅰ期回廊の表示を行うこととした。また東・西両築地上を舗装し苑路として利用出来るように，大極殿院南回廊の中央に幅3mの芝生舗装苑路（グリーンプロック使用）を設け，両築地間を結ぶようにした。第Ⅱ期（奈良時代後半）のものとして，東・西両築地の延長，東朝堂2棟，掘立柱建物1棟の復原表示を行った。築地は平均高さ50cmの盛土を行い，その上面に凝灰石縁石を用い築地幅4.4mを表示した。朝堂院基壇は平均高さ1.2mの盛土上面に凝灰岩縁石でその規模を示し，東西面に各々3ヶ所の凝灰岩切石段階を設置した。掘立柱建物は花崗岩縁石を用い平面表示を行った。なお昨年度施工した部分も含め朝堂院南門以西の南辺及び西辺築地と東掘立柱建物について，砂タイプの

黄色自然色舗装（エポキシ樹脂モルタル舗装）を，朝堂院南門については，アンツーカー混合の褐色自然色舗装（エポキシ樹脂モルタル舗装）を施した。南門基壇上には，動かされた状態で発見された礎石3個を，元の位置に据付け，礎石の不足箇所には真ちゅう



製の輪（直径80cm）を伏せ、輪の中を白川砂混合の自然色舗装を行い柱位置の表示を行った。

（第1図A）

第一次朝堂院に隣接し整備している中央大溝（SD3715）を、近鉄線北側まで、和泉砂岩雑割石溝（幅1.2m）で、95m延長し復原表示を行った。

朱雀門周辺および二条大路整備 平城宮跡は、1988年に奈良県、市が開催する「なら・シルクロード博」の一会場となり、そのゲート施設が朱雀大路跡（市有地）に設置される。結果平城宮跡見学者の南からのアプローチが出来ることになる。そこで今年度は、朱雀門基壇、北側広場（SH1850）と宮内道路（SF1950）を復原表示し、宮跡に足を踏み入れたことが感じられるようにした。朱雀門は、基壇規模を盛土（33.3m×18m高1.2m）により表示し、中央に階段幅（15.3m）のスロープを設けた。盛土法面および天端は張芝とし、門中央3間分とスロープは真砂土混合自然色舗装仕上げとした。朱雀門基壇内側は、広場とこれに続き朝堂院南門に向かう宮内道路（幅20m）を近鉄線境界まで約75mについて碎石舗装を行い、両外側に雑割石溝（幅60cm）を設置した。これに伴い、朱雀門の位置を示しランドマークともなっていた松林の一部が、広場遺構に重なることや南からのアプローチに対しヴィスタの障害ともなっていることから、松の移植（計88本）を行った。（第1図B）

二条大路整備は、昨年度に護岸および埋立てを行った北新大池北半部（約6,100m²）について施工した。張芝による二条大路と堀地の復原表示、玉石積溝による南北両側溝表示、真砂土混合自然色舗装による宮外築地の表示などを行った。なお、北新大池の旧北辺堤にあった暗渠が大垣遺構上を走り整備に支障を来すため、復原表示する二条大路北側溝の底面に現場打溝（幅60cm平均深さ60cm）を設けた。（第1図C）

覆屋周辺整備 「なら、シルクロード博」の開催に伴い、平城宮跡覆屋・資料館の土日開館を実施することから、覆屋見学者用広場・便所および見学路整備を行った。広場は、覆屋や内裏・第二次大極殿地区来訪者の見学拠点として、覆屋東側の県道沿いに碎石舗装（約3,410m²）の広場を整備するとともに覆屋に隣接し便所（108m²）を建設した。（第1図D）便所は鉄骨コルテンルーフ葺、外壁はコンクリートブロック化粧積み仕上げとした。公衆便所にはありがちな“暗い・汚い・臭い”というイメージを一掃するため、出来るだけ開口部やフロア面積を大きくし、脚部より天井に至る大きな窓を設け室内への採光を工夫した。室内は全面タイル張りとし、清潔で明るく感じられるようにした。天井は木製横格子とし、小屋裏換気孔と素通しにすることにより、効率よく自然換気が出来るようにした。入口は南面にとり、男女のスペースを左右に分け、中央部に身障者用便所（男女各1室）を設置し、身障者の動線が出来るだけ短かくした。宮跡内での便所の建設には常に浄化槽の深さが問題となるが、今回も遺構面高と現状地盤高の差が小さく必要な深さを確保することが出来なかった。浄化槽は150人槽程度を必要とし、最も浅く設計しても3mの高さとなるため、現状高に段差のある便所建設位置より東16mのところに4m×6mの合併処理槽を設置し、周囲に盛土・植栽を行うなど景観的に

も目立たないように配慮した。し尿は便所床下に設けた汚泥槽に一旦溜め、そこから浄化槽へポンプにより圧送し処理するようにした。

覆屋西側では、付属棟の改装を行い、警備室と売店（平城宮跡保存協力会に貸与）および休憩場を設けた。この付属棟より西側については、案内広場として整備することとし、今年度は築地跡の舗装および埴積基壇覆屋（南棟）からの苑路整備を行った。この苑路は覆屋外周部をコンクリート平板ブロック貼りとし、復原されている東大溝に木橋を架け、宮内省外周築地跡までを脱色アスファルト自然色舗装苑路とした。

木橋は平城宮の幹線排水路の一つである東大溝にかかる橋で、昨年度門と築地の一部を復原建設した宮内省とその北方の官衙の間を東西に通る道路の延長線上にある。この道路は東方の遺構覆屋群と整備済みの第二次朝堂院・内裏地区とを結ぶ連絡路でもあり、いわば覆屋から復原部分への導入部にあたるところから、橋の位置は遺構とは関係ないものの、その形式は復原的にとりあつかった。すなわち、橋脚部と主橋梁は今後の維持・管理を考慮し、コンクリートおよび鉄骨をもちいたが、化粧梁・歩板・縁押えなど直接見える部分はすべて木製とした。橋全体には中央部で5cmの反りをもたせ、厚6cm；幅24cmの歩板を敷並べた。この歩板は下に渡した根太にそれぞれ手違鋸（ステンレス製）で留め、外見上留金具がみえないようにした。木材はすべて米国産松材をもちい、防腐剤を三回塗布した。

第一次朝堂院整備	朱雀門・二条大路整備	覆屋周辺整備	便所等	説明板・道標設置
24,510m ² 95,000千円	11,820m ² 68,800千円	6,230m ² 42,800千円	186.38m ² 59,000千円	1基・13基 14,100千円

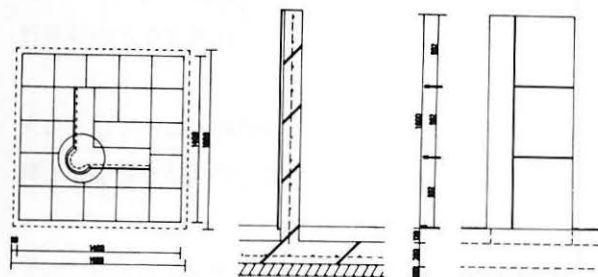
説明板・道標 1979年以降、南面大垣、第二次大極殿院、第一次朝堂院などの遺構復原整備が以前にも増して進展し、多目的苑地、駐車場などの便益施設も新たに充実してきた。また、1987年6月には平城宮跡資料館がこれまでの展示面積を一挙に2倍に拡大し、展示内容も一新した。このような施設の充実に伴って来訪者の急増が見込まれ、平城宮跡の利用に関するインフォメーションサービスの整備拡充が急務となってきた。ところが、これまで平城宮跡内に設置された説明板の多くは、アルミニウム板に文字や図面を写真印刷したアルフォト板を、高さ約1.5～2mの直立型の鉄製躯体に貼り付けたものである。アルフォト板は安価で図版が鮮明であるという利点をもつが、耐候性に弱点があり近年褪色が著しくなってきた。そこで本年度は、デザインが斬新で、しかも強度や耐候性にすぐれた素材を用いた説明板や道標の設置を行った。

まず、設置地点を説明板10ヶ所、道標13ヶ所選定し、そのうち本年度は説明板1基の作成および設置、道標13基の作成と設置を行った。素材には強度、耐候性の両面にすぐれた陶板を採用した。説明板は、第一次大極殿の位置に、第一次朝堂院を北から見おろした風景を描き、形式はこれまでの直立型からやや傾きを持たせた平面型とした。躯体はコンクリートで製作し、この上に陶板を接着し、周囲を凝灰岩切石で化粧した。道標は、中尾芳盛氏の協力を得て平城

宮の建物からイメージされる朱塗りの柱と白壁をモチーフとするデザインとし、白壁の部分に
行先を明示した陶板をコンクリート躯体の上にモルタル接着した。



説明板（第1次大極殿跡）



道標、平面・断面・立面図



道標（資料館前）

2. 藤原宮跡の整備

本年度の藤原宮跡地の整備は、西南隅部において新規に土地購入を完了した橿原市四分町地
内で行った。この地域では橿原市が地域再開発を実施しており、西南隅部の今後の環境整備を
進めるためにも、雨水排水路の整備が急がれる。そこで今年度は市道沿いに排水暗渠（ボック
スカルバート）を30m布設し、橿原市管理の水路に接続した。なお暗渠上面には盛土張芝を行
い市道との境界を明確にした。総工事費は545万円であった。

3. 施設整備

平城宮跡第一・二収蔵庫は、昭和44年に建設されたものであり、すでに18年経過しているが、
近年屋根の損傷が著しく一部落下する恐れがあるため、建設省近畿地方建設局の設計監理によ
り昭和62年12月～昭和63年3月の間に耐摩フッ素樹脂塗装ガリバリウム鋼板に葺替えた。また、
平城宮跡第三収蔵庫二階に設置されている保存科学室が機器の増加に伴ない手狭になったため、
吹き抜け部分を改修し、保存科学データ処理室と保存科学遺物処理室を増設した。（細見啓
三、本中 真、川合教博、渡辺康史）